

平成 29 年度第 1 回博物館懇談会議事録

日時：平成 29 年 11 月 22 日（水）17 時 30 分～19 時

場所：野田市市民会館 雪月桃の間

出席者：懇談会委員・飯野きみ子、沼野秀樹、松浦正典、横川しげ子、米川幸克。郷土博物館館長・関根一男、同学芸員・柏女弘道、大貫洋介、寺内健太郎、田口阿紀（書記）。

1. 博物館懇談会について

今年度 3 名の委員が入れ替わったため、野田市郷土博物館・市民会館の事業概要について柏女学芸員より説明を行った。

●博物館懇談会について

柏女：当館の博物館懇談会は市民に開かれた博物館として、博物館と市民が直接対話する機会を設け、市民の視点から意見をいただき博物館運営の参考にするため平成 24 年度に発足した。他館では博物館協議会において有識者などから意見をもらう所もあるが、当館は野田の地域博物館であるため、博物館の事業について市民の方々から意見を頂きたいということで懇談会を作った。

関根：委員からは忌憚のない意見を述べていただき、今後に活かしたいと思う。

2. 特別展「鉄道の野田～変わりゆくまちと人々の暮らし～」について

寺内学芸員より博物館展示室にて展示解説を行った（議事録省略）。その後市民会館雪月桃の間に会場を移し、補足説明と意見交換を行った。

●補足説明及び意見交換

委員：東武鉄道の成り立ちと野田のまちとの関わりについて、よく順番通りにきれいにまとまっていて分かりやすかった。今回の展示で初めて思ったのだが、今回の企画は子どもには難しかったかと思う。鉄道とまちとの関わりというテーマ自体が子どもには難しかったのかもしれない。

寺内：今回のテーマは子どもを対象とするのは難しいと企画の段階から感じていた。昔の写真などを展示することで、年齢層の高い方に懐かしいと感じてもらったり、地域の人が意外と知らない歴史に気づいて頂くという趣旨になっているので、固いところはある。

大貫：特別展の内容が子どもには難しいので、子ども向けのミュージアムグッズを作成した。

委員：話は変わるが、「開かれたコミュニティ」ということで、最近古民家カフェが流行っている。以前 NHK で、関宿の古民家カフェが 2 つ紹介されていた。市民会館でもそういうカフェをやってみるのはどうか？

大貫：カフェの営業を行う場合は、敷地内で新しく作るよりも既存の施設を活かしていくことになると思う。しかし、現状では設備面や衛生管理上クリアしなければならない点があり難しい。市民会館の建物をそのまま活かすのが理想ではあるが、もしカフェ等のサービスを

始めるのであれば手を加えないといけない箇所が多いと感じる。当館はもともと自動販売機も設置されておらず、敷地内で飲み物一本買えない状況だったが、熱中症対策ということもあり、自販機は何とか導入した経緯がある。その上カフェとなるとクリアしなければならない項目がたくさんあるのかもしれない。

大貫：カフェとまではいかなくとも、少しお茶が飲めるスペースが欲しいという意見はアンケートでいただくことがある。

委員：今回の展示にはいわゆる鉄道ファンのような人は来るのか。

寺内：結構来ているのではないかな。

委員：展示をみていて、説明を受けても「ああそうだったんだ」とは思うけれど、「へえ」と驚くことはあまりなかった。子どもたちも「へえ」という驚きみたいなものがないから説明を聞いても「そうなんだ」で終わってしまうのでは。こういう固い展示だと驚きみたいなものが出づらいのかもしれない。例えば、過去の写真の位置と同じアングルから今の風景を撮ったりして比べるのはいいかもしれない。一つ聞きたかったのだが、昔はトロッコがよく走っていて、うちの前の通りも走っていたらしい。これはどれぐらいまで走っていたのか。

寺内：トロッコ（野田人車鉄道）は、軽便鉄道ができたころから廃れていき、次第に使われなくなっていく。

委員：それは、やはり輸送が鉄道から車になるにつれて鉄道が邪魔になってしまい廃れてしまったということなのか。

寺内：もともと野田人車鉄道とは、江戸川の舟運を補うための輸送手段であった。しかし野田に鉄道が通るようになって、次第に使われなくなっていくようである。

関根：今回の展示では、趣旨と異なるので野田人車鉄道については触れていない。

寺内：今回はテーマが野田線の歴史であったため、内容を絞って野田人車鉄道には触れなかった。

委員：展示の中で、担当が来館者に一番見て頂きたかったのは何か。伝えたい、知ってほしかったものは何だったのかと思った。これだけの情報量をまとめてわかりやすく紹介することはとても大変だったと感じている。それは展示を見ていてよく伝わった。興味を持たれている方などはじっくり時間を使いながら展示をみて楽しめるのではないのかと感じた。そのなかでも、「ここは来館者に一番伝えたい！」みたいなものがあればもっとよかったと思う。でも本当に驚きの連続で、最新の高架事業の話まで、たくさんを知ることができた。現在ここまでで、学生たちは実際どのくらい見学に来ているのか。

寺内：各世代からのアンケート回収率は、10代～30代から30枚ほど、40代以上からは各世代からそれぞれ30枚ずつくらいアンケートをいただいている。中学生で鉄道に興味のある子どもなどからのアンケートもあった。

委員：下津谷さんの思い出話はよかったと思う。

関根：担当の一番伝えたかったところはどこか。

寺内：今回の展示の伝え方が難しかったというところはあった。鉄道というテーマを扱うと

きに、どこまで紹介するかで悩み、結果、通史的なものになってしまった。地域の人が身近な交通手段として活用していた野田線が、延伸していく過程で、市民と関わることで公共交通機関として成り立っていった歴史などを伝えられたらと思った。

関根：今回の展示で一番遠いところはどこまで調査にいったのか？

寺内：距離的には木更津が一番遠かった。これは千葉県知事有吉忠一の関係で、木更津にも有吉通りがあるということで調査に行った。

委員：鉄道を通して野田市を知るということで非常に興味をもって拝見し、とても勉強になった。一つ一つにふりがながしっかり振ってあり、誰もが読みやすくてよかったと思う。しかし説明文によっては長すぎる印象を受けるものもあり、子供は途中で読むことを止めてしまうかもと感じた。短めの文章ももちろんあったので、それに合わせた分量であれば子どもたちも読み切れるかもしれない。最近子ども新聞などでは、大切な言葉には、重要度に応じて1~5個の星マークをつけていたりする。今回も、ここを読んでおけば展示のイメージが分かるというところに何か印をつけておけば、子どもたちはそこを読むだけで話が分かりやすく感じると思った。

関根：それは知らなかった。次回の特別展で参考にしたい。

委員：また、一つの言葉が行変わりすることを「なきわかれ」というが、これを無くすだけでも子どもたちは読みやすい。特に固有名詞の途中は行変えしない方がよいと思う。また、子どもは大きなものや動くものを多いと興味を引く。今回は、野田町駅看板などはインパクトがあつてとても良かった。個人的には電車の模型とかがあればきっと子どもは見入るなと感じた。

柏女：今年の4月に鉄道模型展を実施したが、このときは模型がメインだったので、多くの子どもたちが観に来ていた。特別展の時も模型を制作する話は出たが、特別展は野田線の歴史を紹介することを趣旨としていたので、歴史的な裏付けのとれた模型やジオラマの制作がどこまでできるのかというところでなかなか難しい。

委員：知らないことがたくさんあったので、私自身はとても良かった。子どもに分かりづらいという点については、子どもから大人まで万人に分かるようにしなければいけないのかな、と思った。それが理想ではあるのだろうが、今回のようなテーマはそうでなくとも良かったのではないかなと感じた。以前、講演会で学芸員に話をしてもらった時、野田にいても分からないことがたくさんあったのを知ることができてよかった。

委員：違う話になるが、知人が古いものを博物館に持って行くと言っていたが、そういうものは別にあるのか。保存する場所とか。

大貫：もしそういった話があれば、一度拝見させてもらい、野田市の歴史や文化に関する貴重な資料であれば寄贈していただき展示する、もしくは体験学習用の資料として活用させてもらっている。そういったものがあればぜひ一度見せて頂きたい。多いのが、古いのでいらないと捨ててしまい、そういうものがあつたという話を後で頂くことだ。

委員：だいたいそうになってしまう。

大貫：もう蔵を壊すから捨ててしまう、というものが多いが、そういうものこそ見せてほしいので、まず壊す前に話を頂ければ。時間がなければとりあえず物をお預かりして調査を行うこともできるので、ぜひ。

関根：まずは学芸員が現地に直接行って実際に見てみるということが大事だ。

柏女：生活文化展では新収蔵品を公開する。それはまさに市民からの寄贈資料で成り立っている。全ての収蔵品を公開することはできないが、来館者に「博物館としてこういうものを集めている」ということを伝えられる。またこの展示を通して、いらないもの、捨てる予定だったものでも博物館なら必要としているかもしれないということで連絡を頂ける。実際この展示の後に寄贈の問い合わせがくることは多い。生活文化展は博物館活動の宣伝、寄贈者へのお礼という意味合いもある。

関根：現在、博物館として探している資料はあるのか。

柏女：農具などよく寄贈して頂くが、足踏み式脱穀機は探している。唐箕はよくもらうが、足踏み式脱穀機は当館に1つしかない。心当たりがあれば。

大貫：あと、ローラーがついている洗濯機などはいくら探しても見つからなかった。

委員：「こういうの探しています」というのをもっとアピールしたらいいのではないか。

関根：最近着物の張板などは手に入った。貴重なもの。

委員：他になにか欲しい、集めているものはあるのか。

大貫：子どもが体験で使えるような昔の道具を探している。火のしや電話など体験用の道具も徐々に消耗していくことが考えられるため。

関根：体験学習に関して言えば、子どもを案内するときは学芸員が着物を着て案内する。これはとても好評で、子どもたちがタイムスリップした気持ちになるので喜ばれる。

大貫：イメージは明治、大正期の教員など。

関根：学校関係は最近よくきているのではないか。

大貫：現在学校見学として来館する学校は固定されている。最近バスで来れるか否かというところが大きい。市外では、柏市や流山市の学校も最近よく来る。また、道具の体験をするときに、小学校の教科書をみるとその時代を知っている人の話を聞こうといったような項目がある。そのため、学校から要望があれば、昔の道具を調べる会の人たちを呼んで、当時のことを話してもらう。

委員：つねに学校見学があるということは、子どもが興味を持てるものを探している感じなのか。

大貫：子どもを通して家族で来館したりする。いろんな世代が興味を引くきっかけになる。

委員：今回の特別展は、いつごろから手を付けてどのくらいの期間作業したのか。延べ時間は？

寺内：スタートはテーマが決まった1年前くらいから。昨年の染谷亮作展を受けて、川間駅誘致運動について掘り下げたいと考えていた。そのためイメージを1年以上前から練っていた部分はある。

委員：一番苦勞されていたのはなにか。例えば資料収集で苦勞したこととか。

寺内：資料収集に関しては、主に東武博物館が所蔵する文書の調査を行った。調査自体は楽しみながらやることができた。図録を作るのが初めてだったので、本を1冊作るのがいかにも大変かを感じた。図録に関しては、実際に参考文献を見て自分で調べる方もいるから、参考文献や注釈は、できるだけ付けるように心掛けた。

委員：本当にお疲れさまでした。

3. その他

関根：最後に次回の展示予告について、担当から。

大貫：今回は生活文化展で、考古遺物が中心の子ども向けの展示になる。これまでは旧常設展を元にしたものだったが、春から冬に開催時期をずらしたことで、より子どもが観に来ることもあり、生活文化展をよりわかりやすく変える必要があると感じている。そのため今年度は説明の部分を変えていく予定。

関根：今後ともよろしくお願いします。本日はどうもありがとうございました。